

# オホーツク海宗谷暖流情報

—麻痺性毒性値の上昇に警戒して下さい—

(H27(2015)年8月中旬)

H27(2015)年8月18日

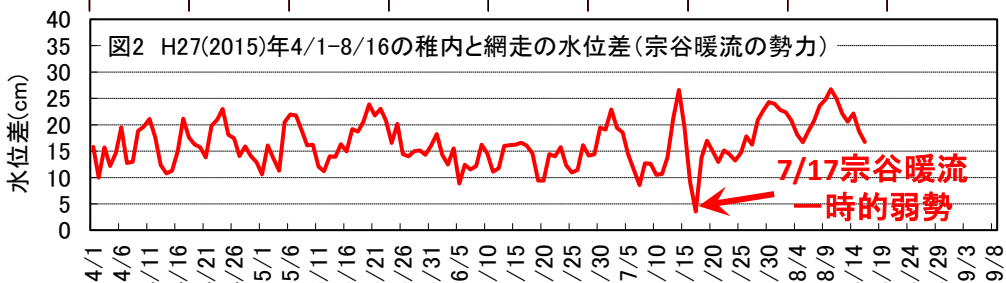
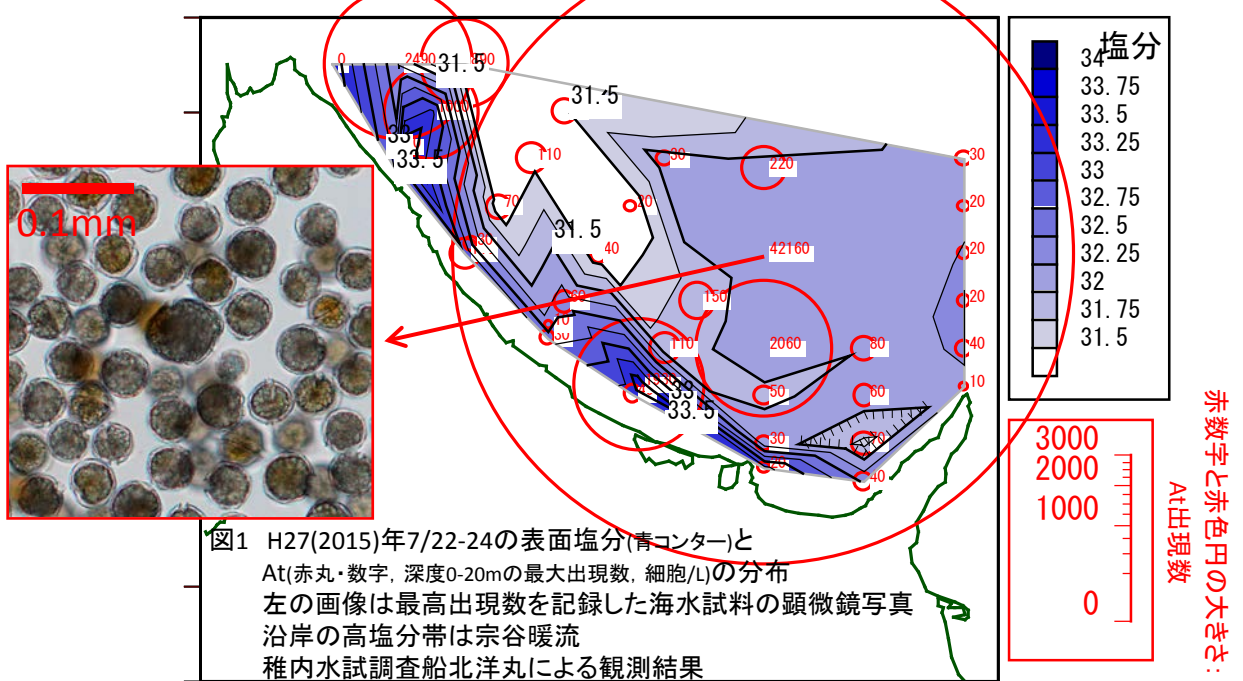
中央水産試験場資源管理部

(担当: 海洋環境G 嶋田・品田・佐藤)

●7/22-24に行った広域調査の結果、麻痺性貝毒プランクトン(アレキサンドリウム・タマレンセ, At)は、主に宗谷暖流の外側に濃密に分布していることが分かっています(図1)。1000細胞/Lを超えるAtの出現は2年連続で、最高出現数(42160細胞/L)は過去14年間で最高となっています。出現数は深度0-10mで多く、タネ(シスト)を形成する直前に現れる大型の細胞(運動性接合子)も含まれています。

●さらに、広域分布調査直前の7/17には宗谷暖流が一時的に弱勢となっていたことも分かっています(図2)。広域調査の結果からも、Atはすでに沿岸の地まきホタテガイ漁場に流入していると推察されます。

●8月上旬～中旬現在、宗谷暖流の勢力は例年並み～強勢ですが、宗谷暖流が再び弱勢となれば、麻痺性毒性値が上昇する可能性があります。今後の毒性値の推移にご注意下さい。宗谷暖流情報は今後も適宜発信予定です。



\*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

# オホーツク海宗谷暖流情報

## —麻痺性毒性値の上昇に警戒して下さい—

(H27(2015)年8月上旬)

H27(2015)年8月3日

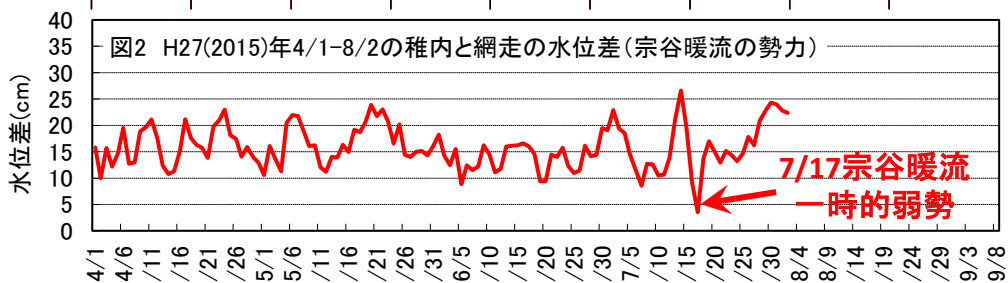
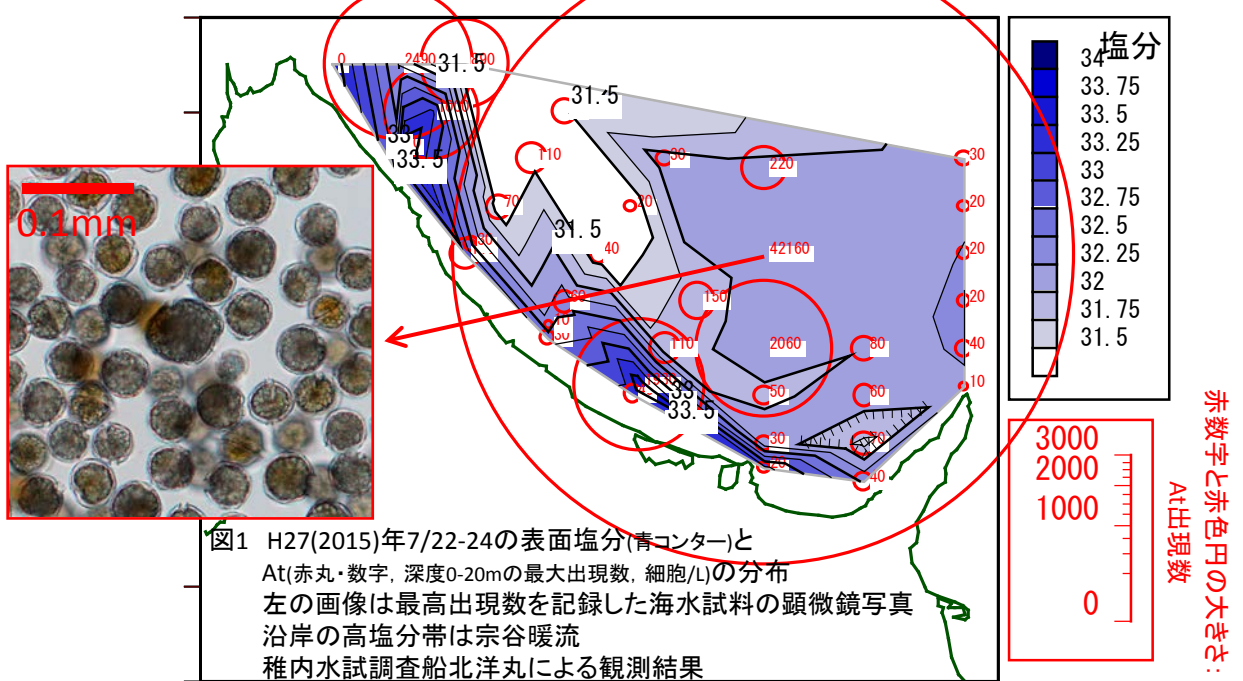
中央水産試験場資源管理部

(担当: 海洋環境G 嶋田・品田・佐藤)

●7/22-24に行った広域調査の結果、麻痺性貝毒プランクトン(アレキサンドリウム・タマレンセ, At)は、主に宗谷暖流の外側に濃密に分布していることが分かっています(図1)。1000細胞/Lを超えるAtの出現は2年連続で、最高出現数(42160細胞/L)は過去14年間で最高となっています。出現数は深度0-10mで多く、タネ(シスト)を形成する直前に現れる大型の細胞(運動性接合子)も含まれています。

●さらに、広域分布調査直前の7/17には宗谷暖流が一時的に弱勢となっていたことも分かっています(図2)。広域調査の結果からも、Atはすでに沿岸の地まきホタテガイ漁場に流入していると推察されます。

●7月下旬～8月上旬現在、宗谷暖流の勢力は例年並み～やや強勢ですが、宗谷暖流が再び弱勢となれば、麻痺性毒性値が上昇する可能性があります。今後の毒性値の推移にご注意下さい。宗谷暖流情報は今後も適宜発信予定です。



\*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

# オホーツク海貝毒プランクトン速報

## —麻痺性毒性値の上昇に警戒して下さい—

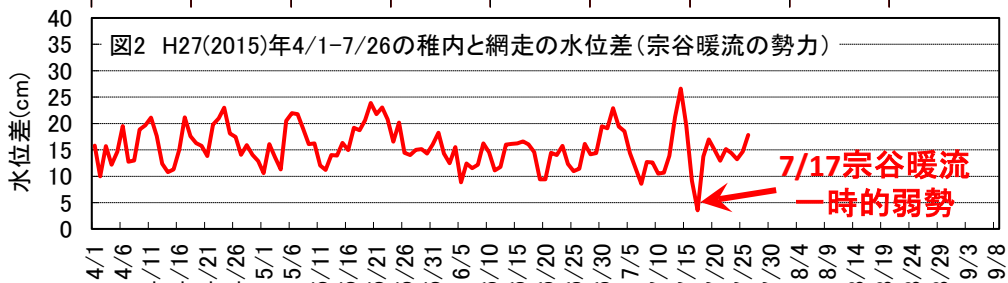
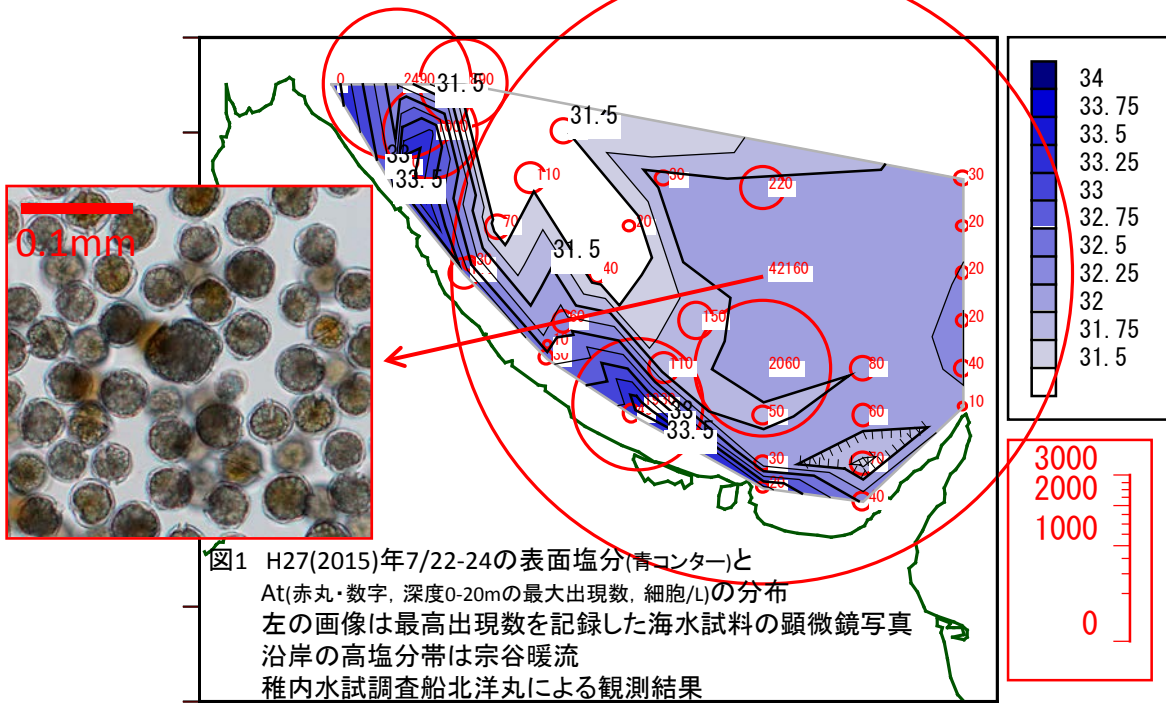
(H27(2015)年7月下旬)

H27(2015)年7月27日

中央水産試験場資源管理部

(担当:海洋環境G 嶋田・品田・佐藤)

- 7/22-24に37定点で採集した海水試料(深度0, 10および20m)の分析結果をお知らせします。
- 麻痺性貝毒プランクトン(アレキサンドリウム・タマレンセ, At)は、主に宗谷暖流の外側に濃密に分布していることが分かりました(図1)。1000細胞/Lを超えるAtの出現は2年連続で、最高出現数(42160細胞/L)は過去14年間で最高となっています。出現数は深度0-10mで多く、タネ(シスト)を形成する直前に現れる大型の細胞(運動性接合子)も含まれていました。
- さらに、本調査直前の7/17には宗谷暖流が一時的に弱勢となっていたことも分かりました(図2)。今回の結果からも、Atはすでに沿岸の地まきホタテガイ漁場に流入していると推察されます。毒性値の上昇に警戒して下さい。
- 広域調査は今回で終了しますが、宗谷暖流情報については今後も適宜発信します。



\*宗谷暖流の勢力は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

# オホーツク海貝毒プランクトン速報

(H27(2015)年6月上旬)

H27(2015)年6月9日

中央水産試験場資源管理部

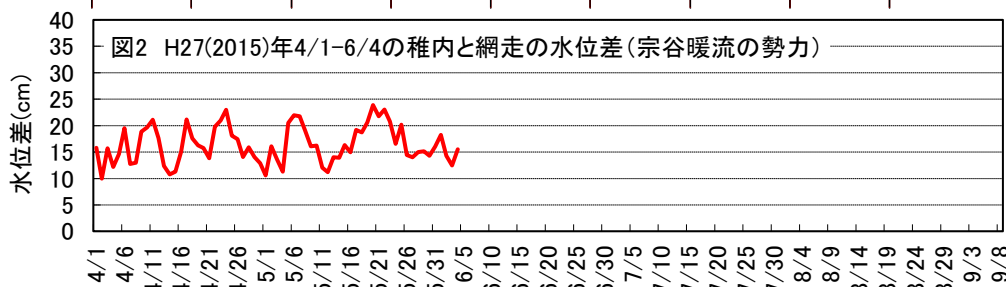
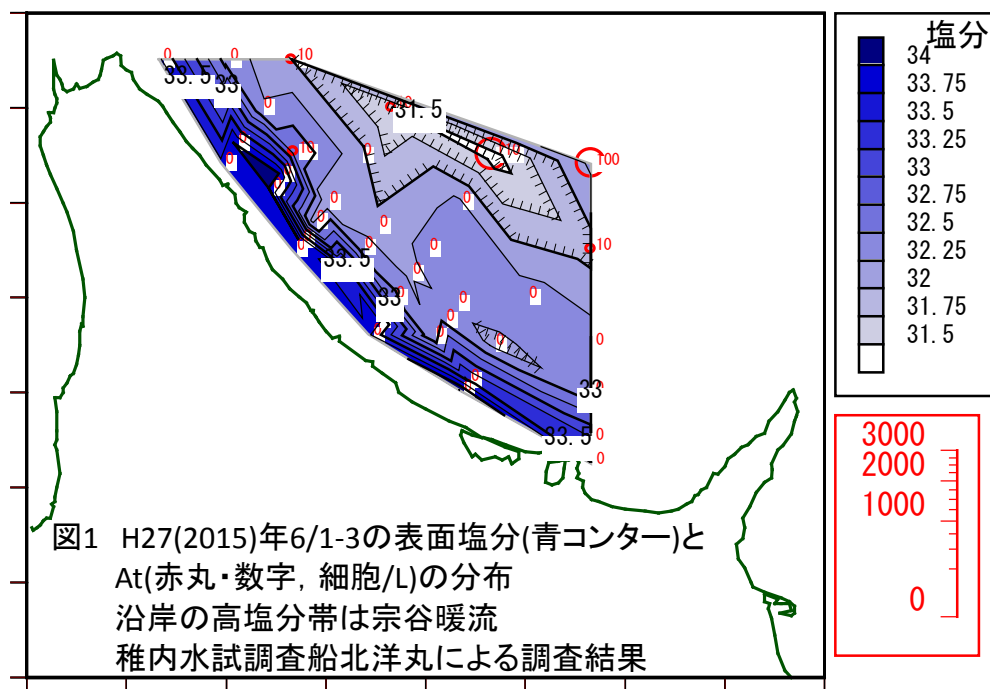
(担当: 海洋環境G 嶋田・品田)

●麻痺性貝毒プランクトン(アレキサンドリウム・タマレンセ, At)の出現は、網走はるか沖の2定点における100-110細胞/Lの出現を除いては、全般に低水準となっています(図1)。1定点あたりのAt出現数は7細胞/Lと、最近の麻痺性貝毒発生(出荷自主規制)年(H24(2012)年, 1定点あたり15細胞/L)の同時期の半数以下となっています。

●Atの出現が低水準であることと、分布が沖側に偏っていることから、稚内から網走の方向に沿岸を流れる宗谷暖流の勢力が弱まって、麻痺性貝毒が発生する可能性は、現時点では低いものと推察されます。

●6月上旬現在、宗谷暖流の勢力はやや弱めですが(図2)、上記の結果から、麻痺性毒性値が直ちに上昇する可能性は低いと考えられます。

●次回のオホーツク海貝毒プランクトン調査は7月下旬を予定しています。



\*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。